

講座「生きること」～語る自分史～

第1回
10月11日(火)
午後2時～

記憶を失うとどうなるのか？

～交通事故にあい脳の中まで出血する～

ゆうすけ工房 草木染作家

ツボクラユウスケ
坪倉優介さん

第2回
10月18日(火)
午後2時～

新型コロナウイルス禍の中で「生きること」を考える

市立ひらかた病院副院長兼看護局長兼医療連携室顧問

シライシュミ
白石由美さん

第3回
10月26日(水)
午後2時～

重い病気のある「きょうだい」がいるということ

～自身の体験と、きょうだい支援の活動から～

NPO法人しぶたね 理事長

キヨタヒサヨ
清田悠代さん

第4回
10月29日(土)
午後2時～

生えてこなかった足

～空襲体験記とその後のこと～

大阪空襲訴訟を伝える会

アンノテルコ
安野輝子さん

- 会場 ラポールひらかた 4階 大研修室
- 時間 各講座 午後2時～4時
- 定員 各講座 先着 144人
- 参加費 無料 ※1講座のみの参加もできます
- 参加申込 9月12日(月) 午前10時から、電話・

ファクス・電子メールで受付開始
※ファクス、電子メールの場合は、次の
必要事項(①～④)を明記してください。

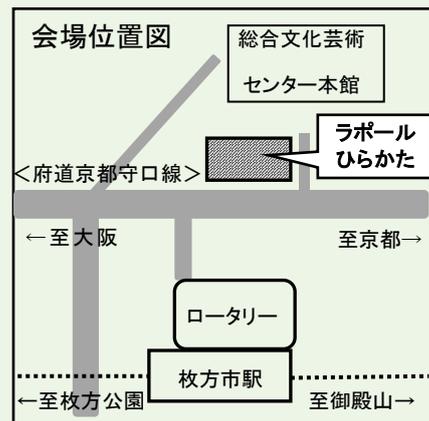
- 必要事項 ①講座開催日 ②氏名(フリガナ)
③電話番号

④保育(生後6か月～就学前児、各講座先着5人)、手話、要約筆記の希望
※保育・手話・要約筆記については、各回の開催日の1週間前までに要予約

- 申込・問合せ先 特定非営利活動法人 枚方人権まちづくり協会

電話 072-844-8788 FAX 072-844-8799

Email hirakatajinkenkyokai@wing.ocn.ne.jp



※新型コロナウイルス感染予防のため、検温、手指の消毒、会場内でのマスク着用やソーシャルディスタンスの確保等について、ご協力をお願いいたします。

主催 枚方市、枚方市教育委員会、枚方人権まちづくり協会

第1回 10月11日(火) 記憶を失うとどうなるのか?

～交通事故にあい脳の中まで出血する～

ゆうすけ工房 草木染作家 坪倉優介さん

さっきまで過ごしていた当たりまえの日常が、突然の交通事故で真っ白の白紙になった。脳死という言葉が見え隠れする生死の境をさまよった結果、『生きる』と言う道に進む事になった。しかしその代償は大きく、今までに覚えた事すべてがリセットされた!

重度の記憶喪失になっても生きていくために何が必要なのか?みんなと探してみたいと思います。

第2回 10月18日(火) 新型コロナウイルス禍の中で「生きること」を考える

市立ひらかた病院副院長兼看護局長兼医療連携室顧問 白石由美さん

新型コロナウイルスは、世界中を恐怖と不安に包み込み多数の感染者と死者を出しました。市立ひらかた病院でも、その戦いが2年半を迎えています。看護をさせて頂き、改めて命の尊さ「生きること」について見直しています。40年の看護師人生を振り返りながら、新型コロナウイルス禍の中で「生きること」をお話したいと思います。

第3回 10月26日(水) 重い病気のある「きょうだい」がいるということ

～自身の体験と、きょうだい支援の活動から～

NPO法人しぶたね理事長 清田悠代さん

4つ下の弟は心臓病で、17歳で他界しました。同じ立場の人に会いたいと思った気持ちから、米国のきょうだい支援プログラムを知り、日本でもきょうだいたちの安心を増やすため、2003年から活動を広げてきました。重い病気のある子どもの「きょうだい」たちが見ている世界と、大人ができること、お伝えできたら嬉しいです。

第4回 10月29日(土) 生えてこなかった足～空襲体験記とその後のこと～

大阪空襲訴訟を伝える会 安野輝子さん

1945年7月16日、私は6歳になったばかりの幼稚園の年長児でした。米軍の投下した爆弾の破片に左足膝から奪われました。足はトカゲのしっぽのように、生えてくると思っていました。小学校は竹の杖をたよりに何とか卒業しましたが、中学校は遠くて、1週間も通えませんでした。今も義足を付けるたび、血の海で泣いていた空襲の記憶がよみがえります。

国は戦後、「空襲被害者とは雇用関係になかった」、と言って謝罪も補償も行いません。当時、私たちは子どもでしたが、銃後を守った、お母さんやおじいちゃんに雇用関係などありません。同じ戦争で亡くなった、元軍人・軍属には、60兆円を超える援護をしてきたのとは大きな差別です。2008年12月、大阪空襲訴訟を起こしましたが、2014年、最高裁で棄却されました。

今年2月に始まった、ロシアのウクライナ侵略では、多くの犠牲者や難民が発生しています。77年前の私たちの姿です。「なぜ大人は戦争をやめないのか」、「大人のつくった社会を生きるしかない子どもたちに、なぜ平和な社会をあたえないのか」。誰にも、私たちと同じ思いをさせたくありません。今年が戦後77年。この活動を始めて50年が経ちました。これからも若い人に、「被害者にも加害者にもなる戦争の非情、惨酷」を、伝えていけたらと思っています。

